

## 小野ゼミ生で居続ける意味を与えてくれた君へ

第17期生 森直也

学問の道を歩み始めて2年。道の先はまだ見えそうにない。しかし、ふと振り返れば、もがきながらも前に進んだ自分の足跡が確かに続いていた。1度は歩みを止めようとした私に手を差し伸べ、今日まで共に歩んでくれた、もう1人の足跡の隣に。私は、そんなかけがえのない同期、江碯舞香に本稿を捧げる。

3年生の11月。私と彼女が所属する英論班は、韓国の学会KSMSで最優秀賞論文賞を受賞した。賞を手にした時のことはよく覚えている。私は、論文代表として、喜びを感じるよりも、小野ゼミ生で居続ける意味を見失ったからだ。それほどまでに論文執筆活動は、辛く苦しいものだった。就活や留学、日々着実に前進する日吉時代の友人は、論文の壁にぶつかり平気で後退する私を待ってはくれない。周りとう違う自分への焦りが常に付き纏った。KSMSの締切1週間前には、白紙の原稿を片手に、英論班解散の危機という絶望を味わった。死に物狂いで提出した原稿が審査を通過してからも、心は休まらない。ご都合により小野先生が韓国に同行できないという事態を前に、大事なゼミ生を君に任せられるのか、と論文代表としての自覚と責任が問われた。呆れたことに、当時の私は、このことを誰にも相談できなかった。せめて論文だけは完成させる。満身創痍の私には、その先も小野ゼミ生で居続ける自分を想像できなかったのだ。

そんな私に追い討ちをかけるように、もう1つの論文班が小野ゼミを去った。当時の雰囲気は最悪だった。入ゼミについて話し合っていたものの、多くの人が辞め、今いる人ですらいつ辞めるか分からない。こんな状況で本当に2年生は入ってくるのか。この環境に残って何が得られるのか。私は将来を憂いた。そんな中、たった1人前を向き、小野ゼミの存続を諦めなかったのが、彼女—江碯舞香だった。彼女は、雑務から矢面に立つ大役まで、その全てを引き受け、論文執筆活動と並行して行われた有志企画にも同期で唯一参加した。何事にも全力で打ち込む、小野ゼミの伝統を必死で守っていた。小野ゼミに懸ける愛を、行動で訴えるその姿を前に、私の胸には、かつての彼女の言葉が熱を帯びて迫った。それは、三田祭最終日の明け方、田町駅でのこと。それまで面と向かって話したことなどほとんどなかった彼女が意を決して話してくれた、小野ゼミに本当に必要な人材を集めるためには、私が必要だ、という言葉だった。論文代表としてもがき苦しんだ自分を側で見てくれていた彼女の目は、真剣だった。そうして迎えた第1回オープンゼミ。大量退会の事実を初めて公表したその日、私は、小野ゼミに残ることを彼女に告げたのだ。

それからというもの、私は、彼女の目指す“温かいゼミ”の実現に向けて、共に奮闘した。温かいゼミとは何か。彼女は、よくこう口にしていて。小野ゼミは忙しい。これまで、愚痴を吐いたり、批判したりする人もいた。たしかにストレスの溜まるゼミかもしれない。でもだからこそ、これからは、共に活動する仲間や、それを支えてくれる小野先生に対する感謝の気持ちや思いやりを忘れずに活動できる雰囲気

を作りたい、と。もちろんゼミの存続には2年生の入会が必要不可欠だ。しかし、ただ入会してもらえればいいわけではない。彼女の言う、温かいゼミでなければ、大量退会の悲劇は繰り返される。重要なのは、2年生の人数ではなく、1人1人がどれだけ小野ゼミに対して強い思いを持てるかどうか。この大切な考えを私に教えてくれたのは、彼女だった。しかし、彼女が私に教えてくれたことは、それだけではない。第2回オープンゼミに向けて、彼女と共に2年生に体験してもらおうケースを作成していた時のことだ。本番まで日数がかなり限られていたが、彼女は、ケースの資料の細部においても、妥協する姿勢を見せなかった。決して同期が少ないことを言い訳にしなかったのだ。きっと中途半端なものでは、温かいゼミの実現以前に、小野ゼミの良さを2年生に感じてもらえないことを、分かっていたのだろう。こうした彼女の考えや、それに伴う行動の全てが、いつしか私の中で大きな指針となっていった。そうして迎えた入会選考。私たちは、ついに18期生という後輩たちを迎え入れるまでに至った。

小野ゼミの先輩となり、まず求められたのは、マーケティングの知識よりも何よりも、後輩たちの声に耳を傾けることだった。これからどんな活動をしていきたいのか。そして、どんなゼミでありたいのか。先輩として、彼らの思いを汲み取り、小野ゼミという組織を動かしていかなければならなかった。そんな中、後輩たちとの心理的な距離を1番に縮めたのもまた彼女だ。彼女は、困っていることがあれば、たとえゼミ以外のことであっても親身に相談に乗り、多くの時間を割いて1人1人と真摯に向き合った。何より、後輩たちと接する彼女の言葉の節々には、小野ゼミに対する強い思いが感じられた。彼女の目指す温かいゼミ。その温かさを身をもって示していた。そうした彼女の姿勢が、同期が少ない上に、新型コロナウイルスによりゼミ生間の物理的な距離が広がる中でも、後輩たちからの信頼を生み、小野ゼミという組織を動かしていくことに繋がったのだと感じる。そうして、ディベートやビジコン、夏ケース、論文執筆活動と、かつて存続の危機に陥っていた小野ゼミの活動が、1つまた1つと息を吹き返していった。

後輩たちが四分野インゼミでの論文発表を終えた時、私は、1年前の自分を思い出さずにはいられなかった。論文発表を終えた彼らの表情は、賞を手にしても小野ゼミ生で居続ける意味を見失い、喜ぶことができなかった自分とは対照的に、笑顔に満ち溢れていたからだ。彼らは、共に活動してきた仲間を讃え合い、そして、活動を支えてくれたことに対する感謝の気持ちを伝えてくれた。私は、この時ようやく、小野ゼミの存続が果たされたことを実感した。彼女が目指した温かいゼミは、たしかにそこにあった。

過去を振り返った今、改めて思う。1度は立ち尽くしたこの道に続いていた自分の足跡は、小野ゼミ生で居続ける意味を与えてくれた彼女と共に歩んだ奮闘の軌跡だったのだ、と。彼女は、小野ゼミを守り、そして、変えた。これまで少なからず存在していた実力主義の冷たさを変えたのだ。彼女が示した温かさは、着実に後輩たちに受け継がれている。私は、この温かさが、今後5年、10年と小野ゼミが続いていく中で、受け継がれ続けることを切に願っている。そして、私は今年、大学院生として、またこの道を歩み出す。彼女がいてくれなかったら、決してここまで辿り着くことはできなかった。これから私は、彼女が守り、変えてくれた小野ゼミの行く末を見守りながら、1歩ずつ前に進んでいこうと思う。私に小野ゼミ生で居続ける意味を与えてくれた、君が紡いでくれたこの道を。まいかちゃん、今日まで本当にありがとう。